

那珂遺跡 15

— 那珂遺跡群第 47 次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 454 集

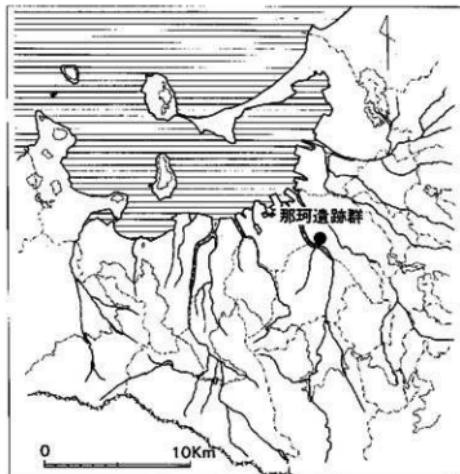
1996

福岡市教育委員会

那珂遺跡 15

— 那珂遺跡群第47次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第454集



遺跡略号 NAK-47
遺跡調査番号 9414

1996

福岡市教育委員会

序

福岡市の陸の玄関口である博多駅の南側には古くから大陸文化流入の先進地として栄えた「奴国」の拠点地域とされる遺跡群が広がっています。今回報告する那珂遺跡はその内の代表的な遺跡であり、近年の再開発に伴い現在までに50次を越える発掘調査が行われ、調査の進展とともに新たな知見が得られています。本書は共同住宅建設に伴って実施された第47次調査を報告するものです。調査の結果、戦国時代の濠跡や地下式土壙と居館に関連するとみられる造構が検出されるなど、多大な成果を収めることができました。本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいたいた地権者の山浦ハル氏、施工の照栄建設の方々を始めとする多くの方々に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は福岡市博多区那珂二丁目における共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成6(1994)年に発掘調査を実施した那珂遺跡群第47次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構と遺物の実測・撮影は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたった。
3. 製図は遺構を藤村佳公恵、遺物を佐藤が行った。
4. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。
5. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9414			遺跡番号	NAK-47
調査地地籍	福岡市博多区那珂二丁目100-1			分布地図番号	24(東部1)
開発面積	712m ²	対象面積	712m ²	調査面積	480m ²
調査期間	1994(平成5)年5月18日～6月28日				

本文目次

I. はじめに	
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 発掘調査の概要	4
IV. 遺構と遺物	4
1 検出遺構	4
2 出土遺物	7
V. 小結	10

挿図目次

第1図 那珂遺跡群と周辺の遺跡	2
第2図 那珂遺跡群調査地区位置図	3
第3図 那珂遺跡群第47次調査遺構配置図	折り込み
第4図 SK02地下式土壙実測図	5
第5図 SK03地下式土壙実測図	6
第6図 SK09地下式土壙実測図	7
第7図 SK08土壙実測図	8
第8図 SD01・05土層・SE06井戸実測図	9
第9図 出土遺物実測図(1)	11
第10図 出土遺物実測図(2)	12

図版目次

図版1 (1) 那珂遺跡第47次調査全景 (東から)	(2) SD05溝 (南から)
図版2 (1) SK02地下式土壙 (西から)	(2) SK03地下式土壙 (南から)
図版3 (1) SK08土壙 (東から)	(2) SK09地下式土壙 (西から)
(3) SD01溝土層 (南から)	(2) SD05溝土層 (南から)

図版4 (1) S E06井戸 (南から)

(3) S K07土壤 (西から)

(2) S E06井戸井戸枠 (南から)

(4) 調査区東側 (北西から)

図版5 出土遺物(1)

図版6 出土遺物(2)

I はじめに

1 調査にいたる経過

1994年1月11日、山浦ハル氏から本市に対して博多区那珂2丁目100-1における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財課であるところの那珂遺跡群の東端に位置し、申請地の北側近接地には第40次調査地が位置している。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受け1994年2月2日に試掘調査を実施した。現況は宅地で、調査の結果、現地表下50cmの地山鳥栖ローム層上面で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積712m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。山浦ハル氏と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年5月18日から6月28日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 山浦ハル氏

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 學（前任） 荒巻輝勝

第2係長 山崎純男（前任） 山口譲治

庶務担当 吉田麻由美（前任） 西田結香

調査担当 試掘調査 皆波正人

発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾花恵吾、柴田博、高田勲、高田勘四郎、中村米重、本村久利、森本良樹、伊藤英伸、尾崎真佐子、河津信子、桑原美津子、境フジ子・為房紋子、福田友子、藤原直子、前田京子、相川和子、田中ヤス子、藤野邦子、藤村佳公恵、星子輝美、齐田紀代美、千住香織

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の山浦ハル氏、施工の照栄建設株式会社をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

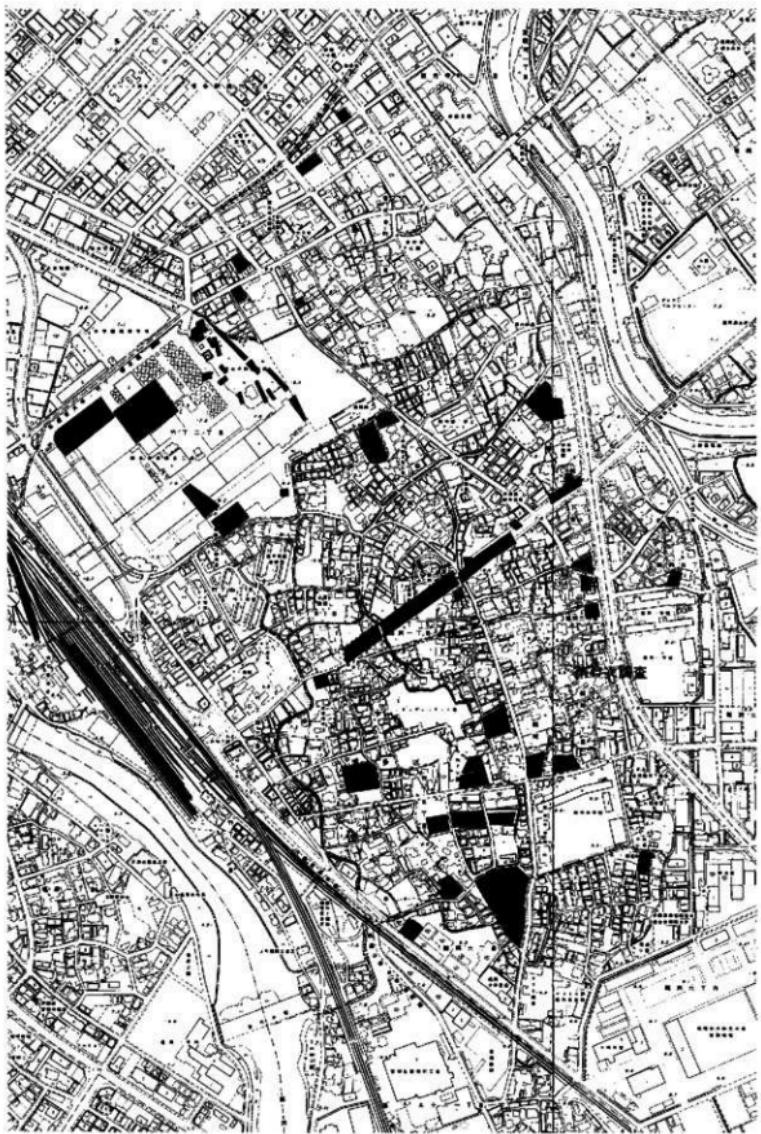
II 遺跡の位置と環境

那珂遺跡群は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。その範囲は南北1.5km、東西1km、標高は10~15m前後を測る。那珂遺跡群が位置する台地はその南東の春日丘陵から標高を北に下げながら延びる低丘陵上に立地する。同じ連続する台地上に位置する北側の比恵遺跡群、南側の五十川遺跡群とは本来は一連の遺跡である。春日丘陵からベルト状に延びる丘陵群には「奴国」の換点とされる遺跡群が分布している地域である。弥生時代には当遺跡の他に比恵遺跡群や南東側の台地上の板付遺跡など大規模な集落が営まれている。古墳時代以降も引き続き丘陵上では集落が展開し、那珂川流域には首長墓



- | | | | |
|------------|-------------------|-------------|-------------|
| 1. 博多遺跡群 | 7. 那珂遺跡群 | 13. 井尻遺跡 | 19. 赤井手遺跡 |
| 2. 福岡城 | 8. 那珂深タツ遺跡、那珂君休遺跡 | 14. 曲佐遺跡群 | 20. 三宅麻寺 |
| 3. 堅柏遺跡 | 9. 板付遺跡 | 15. 須恵舟型埴輪群 | 21. 野多日遺跡 |
| 4. 吉原本町遺跡群 | 10. 諸岡遺跡 | 16. 須恵永田遺跡 | 22. 野多日粘波遺跡 |
| 5. 吉塚遺跡群 | 11. 雪原遺跡 | 17. 須恵岡本遺跡 | |
| 6. 比恵遺跡群 | 12. 五丁川遺跡 | 18. 須恵四丁目遺跡 | |

第1図 那珂遺跡群と周辺の遺跡



第2図 那珂遺跡群調査地区位置図

とされる前方後円墳が築造される。当古地のほか中央に福岡平野では最古の前方後円墳である那珂八幡古墳、その北約500mには筑前地域最大級の東光寺剣塚が築造されている。比恵遺跡群内では墳丘および主体が失われ周溝のみが残る円墳が確認されている。板付南台地上においても古墳が築造されている。比恵遺跡群では6世紀後半代の大型倉庫群、建物、柵が検出され、536(宣化)元年に設けられた「那津官家」に関連する遺構と推定されている。那珂遺跡群ではそれに続く時期からその後8世紀前半に至るまでの正方位に主軸をとる溝、大型建物が検出されている。6世紀から7世紀初頭にかけての古い時期の瓦の出土例もあり、「那津官家」もしくはその後身に開連する官衙的な施設、あるいは郡衙が営まれていたと考えられている。中世には台地上で区画溝をめぐらせた居館とみられる遺構が数次にわたって検出されており、その性格、区画内の遺構の状況がよくわかっていないなど今後検討されるべき課題が多い。

III 発掘調査の概要

那珂遺跡群第47次調査区は那珂遺跡群の東端部分に位置し、標高8mを測る。第40次調査区の南120mに位置する。現況は宅地であった。調査は1994年5月18日にバックホーによる表土剥ぎから始め、堆土の大半は施工業者の協力を得て、調査区域外に搬出した。遺構面は現地表下50cmの鳥栖ローム層上面で検出した。調査区域の全城は後世に削平を受けており、遺物包含層は残存していない。弥生時代中期の遺構が調査区西端、戦国時代の遺構で西半部での検出にとどまり、削平の度合いの著しさを示す。戦国時代16世紀代の遺構は溝2条、地下式土壙3基である。SD01溝は幅1.5m、深さ1.0mの断面逆台形の溝で、L字に屈曲する。SD05溝は幅3.0m、深さ1.2mの断面V字形の溝で調査丸を南北に緯断する。地下式土壙SK02・03は両溝の間で、SD01のコーナーに出入口に向かう状態で検出された。残存する深さは60cm前後を測る。SK03からは銅製釣鐘形分銅、金銅製噺形、硯などの地下式土壙としては異例な遺物が出土した。6月15日に調査区全景の写真撮影を行い、翌16日からは遺構実測にかかる。6月20日には東側の残土を搬出し、残り部分の遺構検出にかかったが、削平が著しく遺構は検出されなかった。調査は6月28日で終了した。

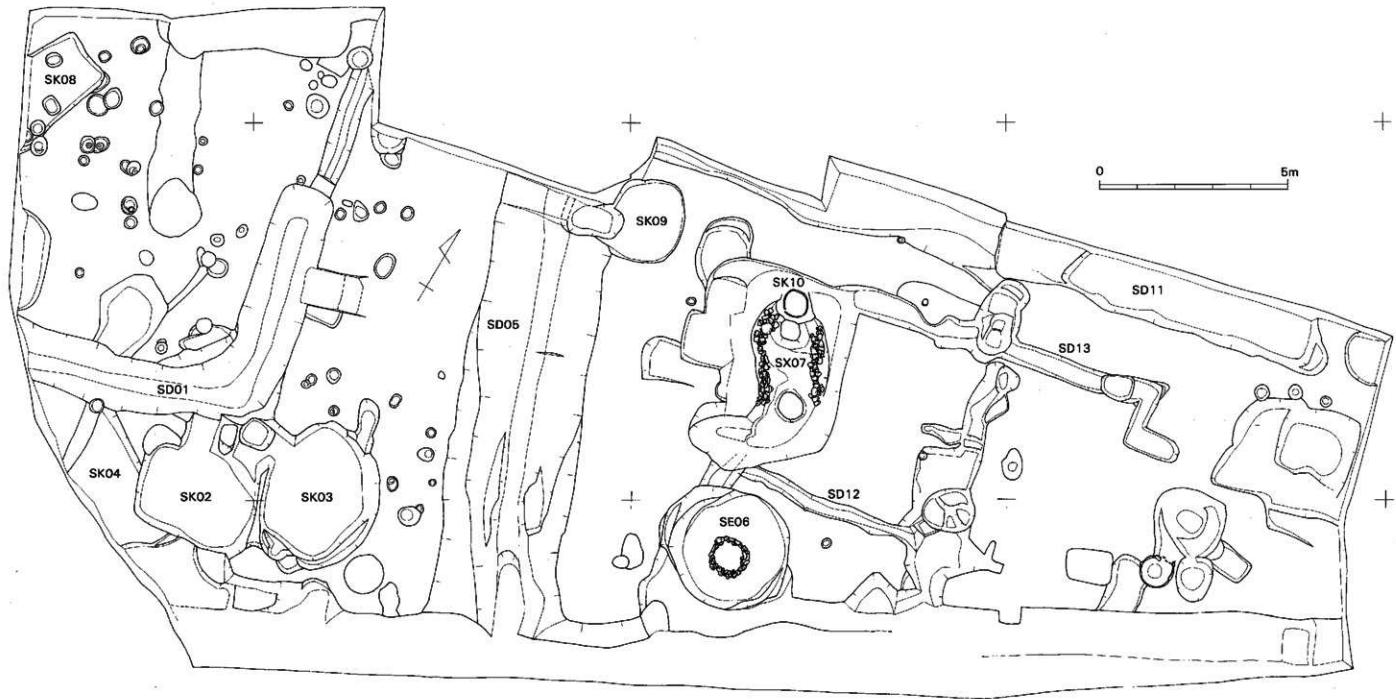
IV 遺構と遺物

1 検出遺構

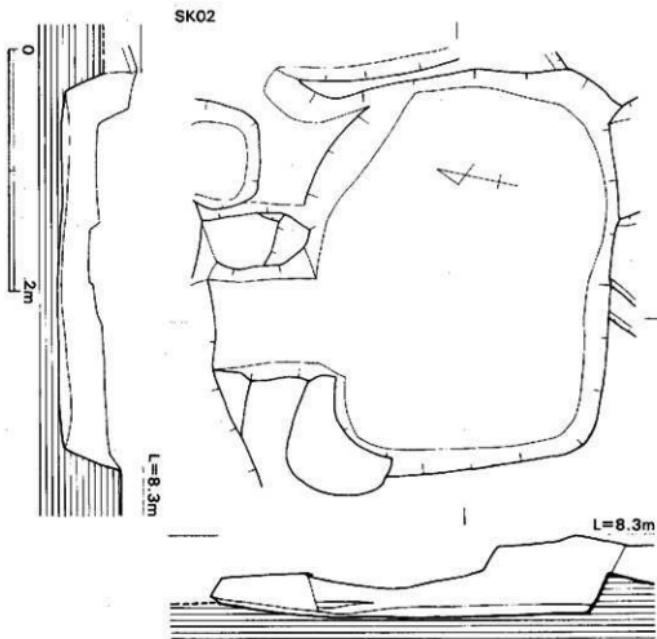
地下式土壙 基本的には入口と考えられる竪坑部、横穴状の通路部、地下式の擴室からなる。いずれも通路部、擴室の天井部は削平により残存していない。埋土に地山ロームがブロック状にみられたことから、削平前にはすでに崩落していたようである。

SK02(第4図、図版2) 調査区の南西で、L字形にめぐるSD01溝のコーナーで検出された。竪坑はSD01と重複しているとみられるが、SD01の埋土との識別は困難で、切り合の関係は不明である。通路部の一部もSD01との重複が考えられ、検出した長さ3.3m、幅2.5m、残存する深さ0.6mを測る。擴室は不整圓形を呈し、床面での長さ3.0m、幅2.3m、残存する深さ0.3mを測る。主軸の方位をN-12°-Wにとる。

SK03(第5図、図版2) 調査区の南西で、L字形にめぐるSD01溝のコーナーでSK02の東側で方位を90°違えて検出された。竪坑の平面形は通路の床面で確認した。竪坑は一辺0.8mの隅丸正方形



第3図 球河遺跡群第47次調査発掘記図



第4図 SK02地下式土壙実測図

を呈し、通路床面からの深さ25cmを測る。通路部は長さは1.5m、幅1.0m、残存する深さ65cmを測る。壇室は不整橢円形を呈し、床面での長さ2.6m、幅3.1m、残存する深さ65cmを測る。主軸の方位をN-12°-Wにとる。埋土からは銅製釣鐘形分銅、金銅製歎形、硯などの多様な遺物が出土した。

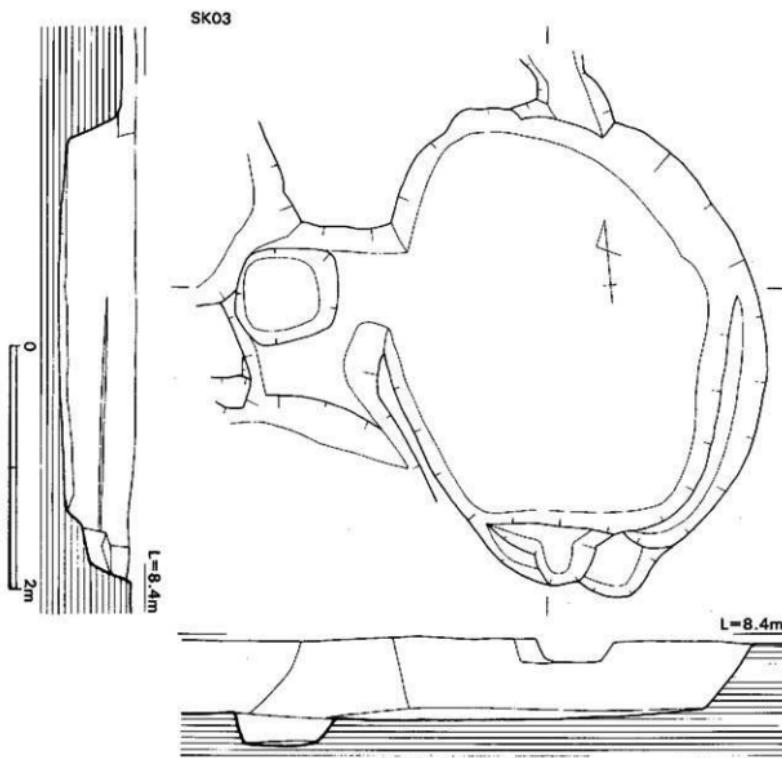
SK03 (第6図、図版3) 調査区の北端中央部で、南北に延びるSD05溝の東側で検出された。竪坑はSD05と重複しているとみられるが、SD05の埋土との識別は困難で、切り合い関係は不明である。SD05壁面で確認した竪坑の平面形は不整橢円形を呈し、通路部を包括している可能性もある。検出した長さ2.0m、幅2.2m、残存する深さ1.1mを測る。壇室は不整橢円形を呈し、床面での長さ1.9m、幅2.2m、残存する深さ1.2mを測る。主軸の方位をN-22°-Wにとる。

土壙

SK08 (第7図、図版3) 調査区の北西端で検出した平面隅丸方形の土壙である。西側は調査区外に延びる。検出した長さ2.3m、幅1.8m、残存する深さ0.3mを測る。主軸の方位はN-23°-Eにとる。

溝

SD01 (第7図、図版3) 調査区の西側で検出したL字状に屈曲する溝状遺構である。幅1.2~1.7m、深さは0.9~1.0mを測る。調査区域内では延長1.1m検出した。底面は西側から東側、南側から北側へ低くなっている。溝の断面形は逆台形を呈する。主軸の方位はN-15°-Wにとる。屈曲して南北



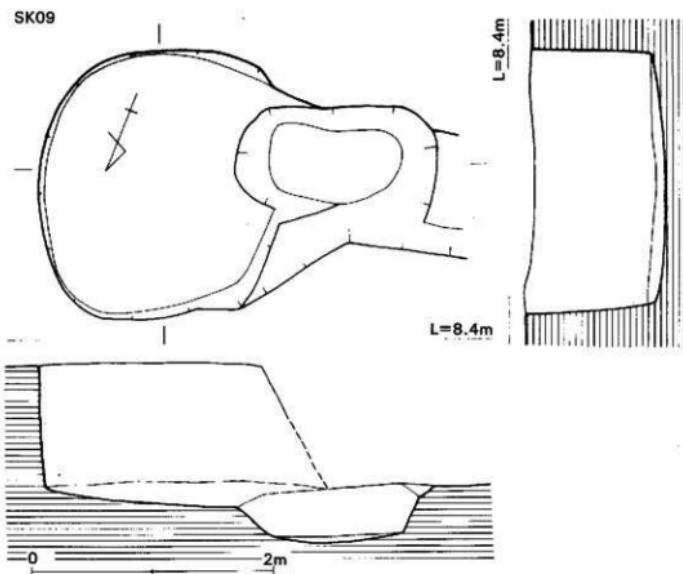
第5図 SK03地下式土壤実測図

方向にのびた部分の土層堆積状況を示す。I層は黄褐色土混じりの灰褐色土、II層は黄白色粘土ブロックを含む灰褐色土、IIIは黄褐色土粒子を含む灰褐色土である。

S D 05 (第7図、図版1・3) 調査区中央で検出した南北に走る溝状遺構である。幅2.2~3.0m、深さは1.1~1.2mを測る。調査区域内では延長1.2m検出した。底面は北側から南側へ低くなっている。溝の断面形はV字形を呈する。調査区北側壁面の土層堆積状況を示す。I層は黄褐色土ブロックを含む灰褐色土、II層は灰褐色土、III層は黄褐色土混じりの灰褐色土、IV層は黄褐色土粒子を含む灰褐色土、V層は灰色土、VI層は灰色粘質土である。底面付近からまとった量の土師器小皿、杯が出土した。

井戸

S E 06 (第8図、図版4) 調査区中央で検出した近世の遺構である。直径3.3mの不整円形の掘り方の中に桶状の井戸枠が構築されている。井戸枠の上端内径50cmを測り、その上部の周囲に縄を積み補強している。井戸枠は掘り方上端から1.4mの高さから底面まで4段遺存しており、石積みの下位との間に桶1段分が腐朽しききたとみられるすきまがある。掘り方の底径は0.6mを測る。他に近世の



第8図 SK09地下式土壌実測図

遺構ではS E 06の北側で長さ5.5m、幅4.0m、深さ1.3mの平面隅丸方形の土壌SK07、図版4)が検出された。底面の長辺の沿って石積み、木杭の痕跡が残り、短辺の北側には瓦質の甕が据えられていた。

2 出土遺物

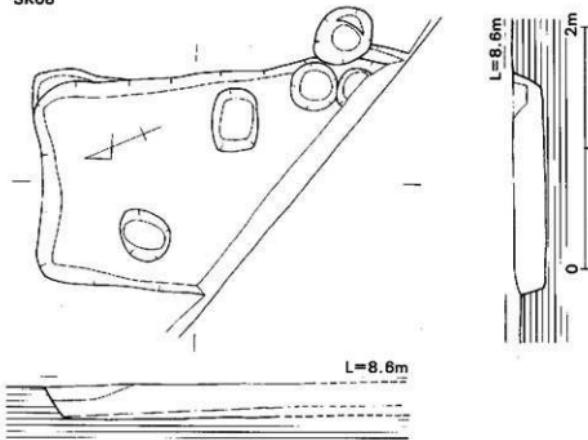
S D 05出土遺物 (第9図、図版5)

土師器 底部は糸切離しにより、体部外面から内底部まで横ナデされる。

小皿(1~7) 1は底径3.5cmとやや小さめ底部から体部が大きく外反する。外面は口縁端部の下に緩い稜をなす。口径6.6cm、器高1.8cmを測る。2・3の体部はほぼ直線的に外上方にのびる。2の口径6.7cm、器高1.6cm、底径4.4cm、3は口径6.8cm、器高1.5cm、底径4.4cmを測る。3・4は体部中位で屈曲する。4の口径7.0cm、器高1.6cm、底径4.4cm、5は口径7.0cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。6は器高2.0cmとやや高く、体部下半は丸みをもち、口縁部は直線的にのびる。口径7.5cm、底径4.0cmを測る。7は口径7.0cmとやや大きめ偏平な形状をとる。口径8.4cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。

杯(8~13) 8も小皿7と同様に偏平な形状をとる。口径10.3cm、器高1.6cm、底径6.9cmを測る。9は体部を大きく外反させる。口径10.5cm、器高2.4cm、底径6.0cmを測る。10体部下半は丸みをもち、口縁部は直線的にのびる。口径10.8cm、器高2.3cm、底径7.0cmを測る。11~13は体部の底部付近で屈曲し、口縁部は直線的にのびる。11の口径10.8cm、器高2.1cm、底径6.7cm、12は口径10.

SK08



第7図 SK08土壤実測図

8cm、器高2.4cm、底径5.9cm、12は口径11.3cm、器高2.7cm、底径5.8cmを測る。

青花 (14) 内底見込みに簡略化された立花文を染付けしたもので、幅狭の高台疊付きはカキ取りにより露胎とし、他は透明の釉が薄く掛けられている。胎土は白色を呈する。

陶器 碗 (15) 体部の下半は丸みをもち、中位で屈曲する。直立ぎみの体部の上半から口縁部はわずかに外反する。底部の削り出しあは浅い。唐津系の碗とみられる。

石製品 砧石 (16) 淡黄灰色を呈する頁岩である。四面とも使用している。

越州窯系青磁 碗 (17) 蛇ノ目高台を削り出した底部片である。灰緑色の釉が造存する部位すべてに掛けられている。胎土は精良で灰白色を呈する。混入品である。

SK03出土遺物 (第9図、図版5)

石製品 砧 (18) 淡赤褐色を呈する輝緑凝灰岩製の硧である。完存しており、全長10.3cm、幅5.6cm、厚さ1.0cmの長方形を呈する。表面は丁寧に整形されている。

陶器 小皿 (19) 口径4.5cm、器高0.9cm、底径2.7cmを測る小型品で、完存している。淡緑白色透明の釉が全面に施され、胎土は黄白色を呈する。外底に目跡がみられる。

金属製品

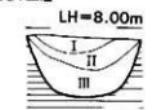
金銅製錐形 (20) 推定される全長21.3cm、基部幅22mm、厚さ0.5mmを測る。基部の下端24mmからはぞ状に刺り込まれ直径2~3mmの孔が長軸方向に2ヶ所ずつ穿たれている。

銅製釣鐘形分銅 (21) 六角形に面取りされ、全長3.0cm、最大径は上部にあり、2.4cmを測る。重量は34gを計る。

銅製金具 (22・23) 同形同寸のものが2点出土している。兜吹返の据文であろうか。全長6.6cm、幅1.5cm、厚さ3~4mmを測る。

不明錫製品 (24) 中空で箱状の錫製品である。

SD01土層



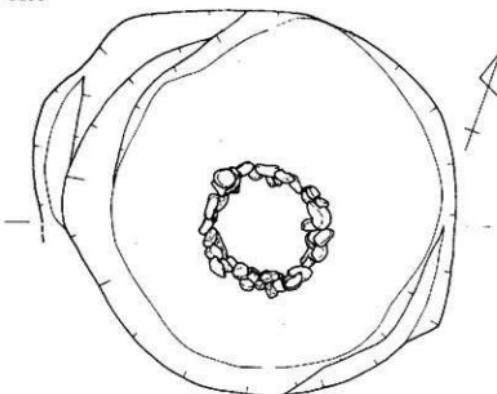
- I 黄褐色土混じりの灰褐色土
- II 灰褐色土
(白色粘土ブロックを含む)
- III 灰褐色土
(黄褐色土粒子を含む)

SD05北壁土層

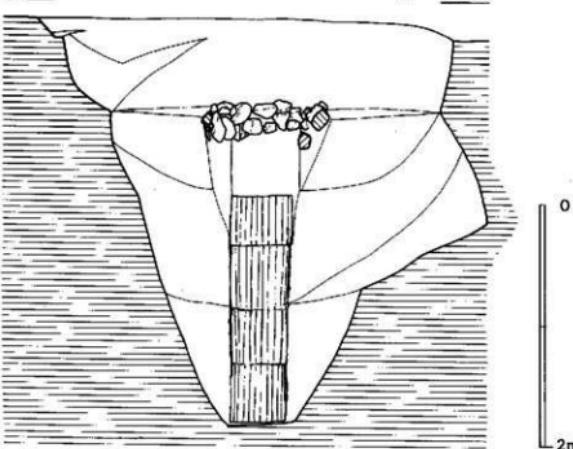


- I 灰褐色土
(灰褐色土ブロックを含む)
- II 灰褐色土
- III 黄褐色土混じりの灰褐色土
- IV 灰褐色土
(黄褐色土粒子を含む)
- V 灰色土
- VI 灰色粘質土

SE06



LH = 10.20m



第8図 SD01・05土層・SE06戸内実測図

他に、不明鉄製品(25)、漆断片(26)が出土しているが、いずれも遺存状態が劣悪で、詳細はここでは報告できない。今後、自然科学に基づいた分析が必要である。

S K08出土遺物 (第9図、図版6)

弥生土器

壺 盖(27) 口縁部に紐を通すための2ヵ所の穿孔がみられる。もう一方の穿孔部位は欠失している。天井部に平坦面をもつ。外面とも器表の磨滅が著しく、調整は不詳。外面は丹が塗布されている。口径13.2cm、器高2.6cmを測る。焼成は良好で、胎土には砂粒を含み明赤褐色を呈する。

甕(28・29) いずれも底部片で、遺存している外面は刷毛目、内面はナデを施す。27の焼成は良好で、胎土には粗い砂粒を含み橙色を呈する。底径7.6cmを測る。28の焼成は脆弱で、胎土は砂粒を多量に含み明赤褐色を呈する。内面には煤が付着している。底部中央に焼成後穿孔されている。底径9.4cmを測る。

瓢形土器(30) 壺の胴部中位以上と甕を複合した形状をとる。鋸先状口縁をもち、口縁端部には刻み目を施す。壺の胴部と甕の口縁下に断面M字状の突帯をめぐらせる。外面は丹が塗布されている。

石戈(31) 内と援の孔部分が残る。闊部幅7.8cm、最大厚さ0.6cmを測る。内は基部4.0cmの台形である。S K04からの出土である。

V 小 結

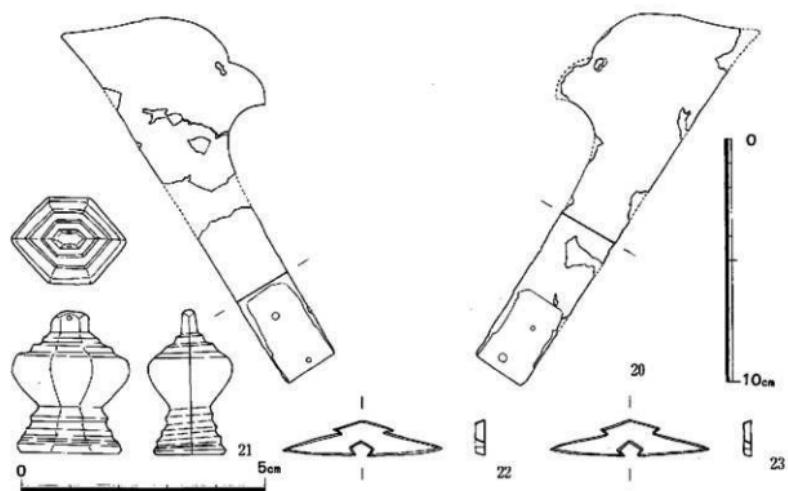
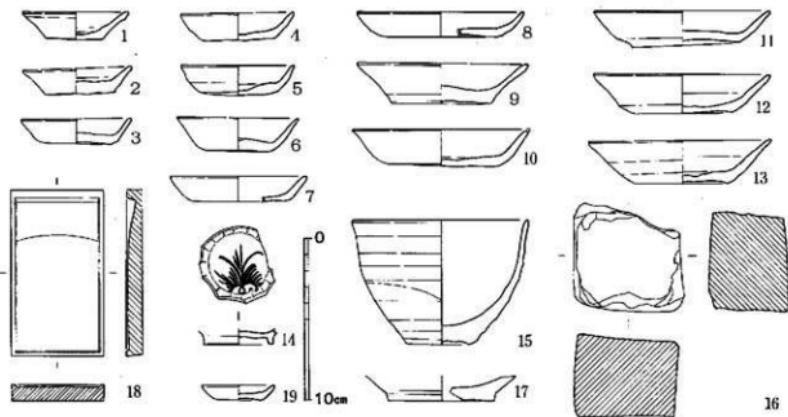
今回の調査では、地下式土塙3基とそれと重複する形で溝が検出された。那珂遺跡群第28次調査では15世紀後半から16世紀前半にかけての溝が埋没した後に築造された地下式土塙が検出されている。溝の外寄りの肩に竪坑を穿ち、溝と直交する方向の外側に壇室を設けている。那珂遺跡群と同じく御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地上に位置する諸岡遺跡の第10次調査で検出された地下式土塙は、溝が埋没した後に竪坑を穿ち、傾斜する方向に壇室を設けている。諸岡遺跡第14・17次調査では、館址の南・西片を取り巻くとみられる土塙・溝に伴う地下式土塙6基が検出されている。地下式土塙は土塙内線に竪坑の入口部を穿ち、土塙に直交する方向に壇室を設けている。その後の第18次調査区は土塙の南西側に位置するが、十塙の外側で地下式土塙5基が検出されている。地下式土塙の南西側では堅牢に築造された布堀りの掘立柱建物が検出され、掘り方内からは明代の青花磁片が出土している。

今回の調査で検出されたSD01とSD05にはさまれた幅5mの空間には、地下式土塙以外の遺構は検出されず、また溝の土層に地山ロームがブロック状にみられたことから、土塙がめぐらされ、諸岡遺跡第14・17次調査検出の地下式土塙と同様に十塙内縁に竪坑入口部を穿ち、土塙と直交する壇室を築造した可能性が強く考えられる。管見によるかぎり旧那珂郡以外でこのような検出例は知られていないが、地下式土塙SK03の埋土から出土した銅製釣鐘形分銅、金銅製鍬形、硯などといった一般的な集落はおろか居館でさえ出土をみないような多様な遺物が示す意味とあわせて、今後検出例を重ねて検討することによって判然としない地下式土塙の性格が徐々に明らかになってくるであろう。

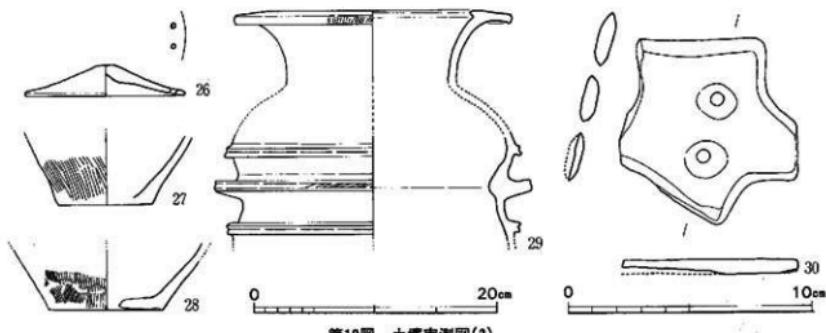
註

註1 福岡市教育委員会『那珂6』 1992

註2 福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告(7)』 1980



第9図 出土遺物実測図



第10図 土壠実測図(2)

註3 福岡市教育委員会「諸岡遺跡－第14・17次調査報告」 1984

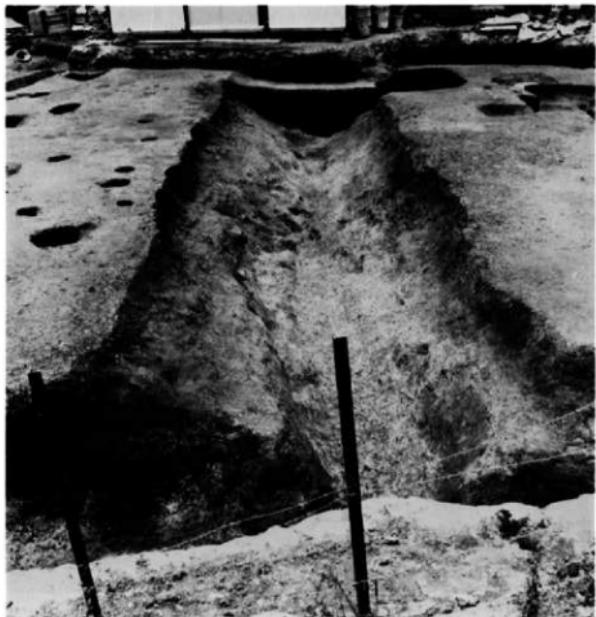
註4 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告(12)」 1987

註5 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告(2)」 1975

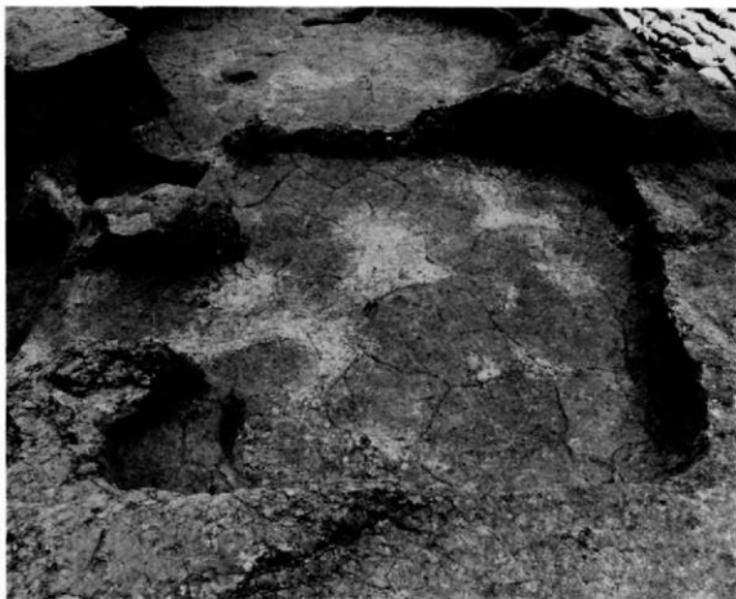
図 版



(1) 那珂遺跡第 47 次調査全景（東から）



(2) SD 05 溝（南から）



(1) SK 02 地下式土壤 (西から)



(2) SK 03 地下式土壤 (南から)



(1) SK 08 土壌 (東から)



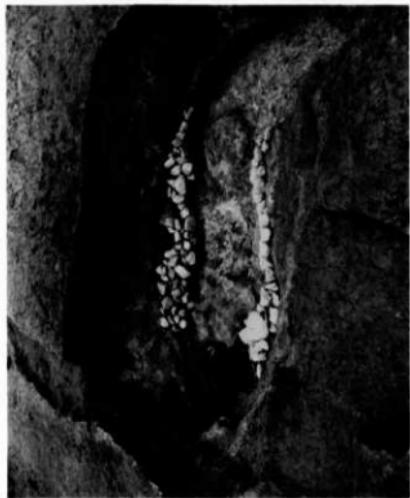
(2) SK 09 地下式土壌 (西から)

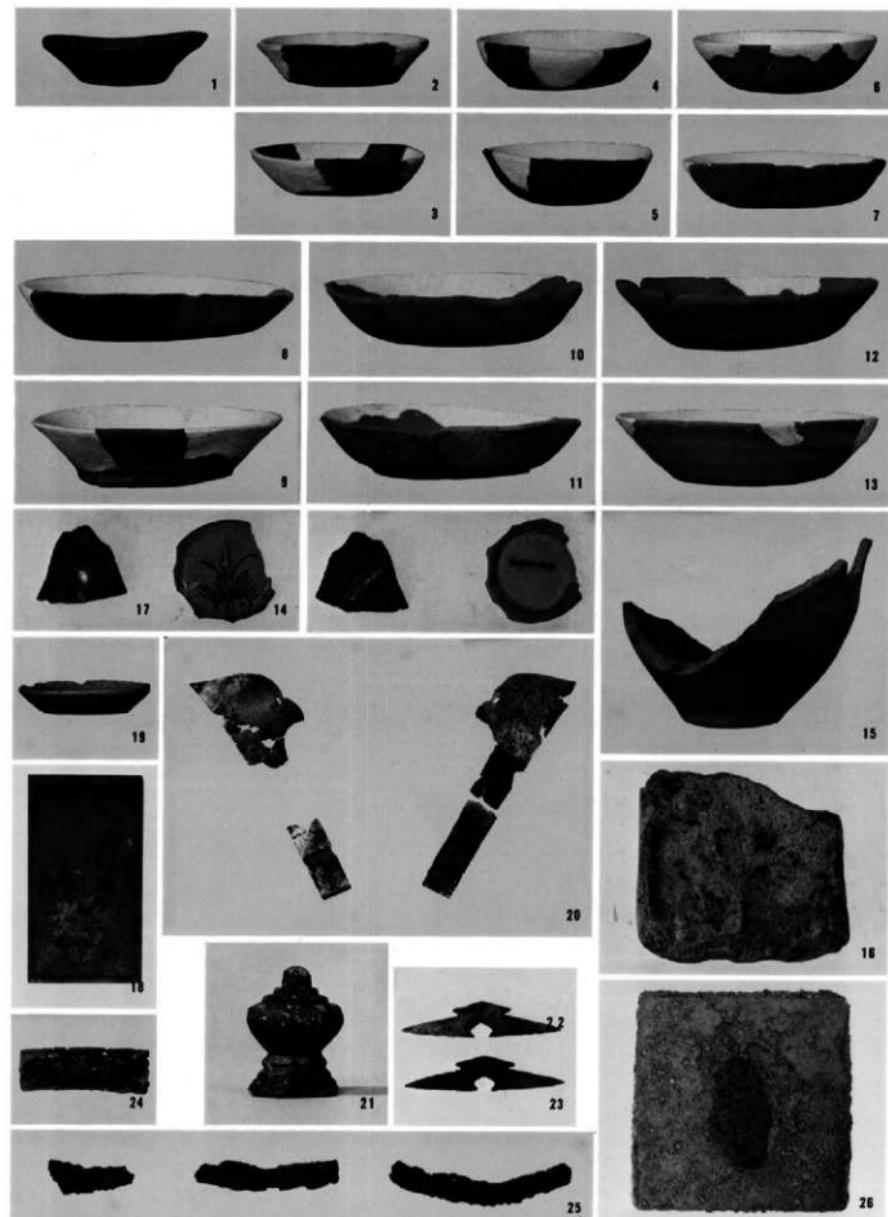


(3) SD 01 溝土壌 (南から)

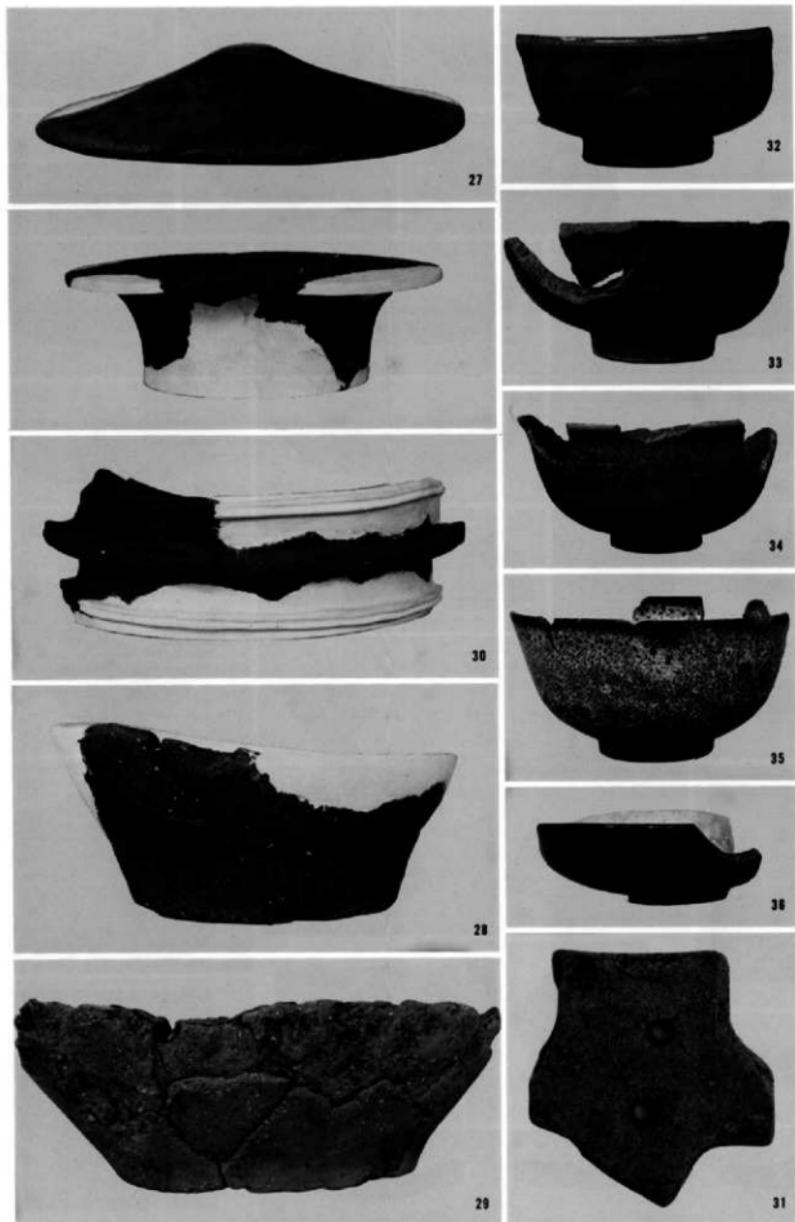


(2) SD 05 溝土壌 (南から)





SD 05 (1~17) SK 03 (18~26) 出土遺物



SK 08 (27~30) SE 08 (32~36) 出土遺物

那珂遺跡 15
—那珂遺跡群第47次発掘調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第454集
1996年（平成8年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092) 711-4667

印 刷 金九印刷株式会社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目46の1号
(092) 621-4257
